

3 シンボルとしての広瀬川河畔にみる歴史的風致

生糸
のまち

復興の
心意気

(1) 「水と緑と詩のまち」の原風景

市街地の中央を流れる広瀬川は、水量が豊富な農業用水として現在も利用されるが、単にその地理的な特徴だけではなく、時代に応じて様々な歴史や文化的背景に紐づけられることで、本市のシンボルとして大切にされてきた。

正保2年(1645)、当時の藩主に対する「舟運再開の申し出」の記録が残るように、江戸時代には舟運が主用途であった。現在の交水堰辺りは河岸として利用され、河岸周りは積み荷の集出荷による市場が形成され、にぎわう場所であったとされる。

「生糸のまち」であった明治から昭和初期にかけては、糸を繰る過程で大量の水を消費することから、川沿いには多くの製糸工場や撚糸工場、レンガ倉庫が立ち並んだ。特に、厩橋から久留万橋までの区域は中心商店街と接しているため、工場で働く人々や買い物客が行き交い、大いににぎわう場所となった。近隣には、柳座や敷島座など前橋の大衆文化を牽引した芝居小屋や、料亭がいくつも建てられ、広瀬川の川面には「かき船⁶」と呼ばれる割烹船が停泊するなど、「生糸のまち」の旦那衆の娯楽も集積した。また、大正14年(1925)には、萩原朔太郎が詩「広瀬川」を収めた「純情小曲集」を出版したことで、全国に知られる場所にもなった。

しかし昭和20年(1945)8月5日、本市は大規模な空襲を受け、535人⁷が犠牲となり、市街地の約80%が焦土と化す甚大な被害を受けた。その中でも特に悲惨をきわめたのが、比刀根橋の北側にあった小柳町(現住吉町二丁目)の防空壕である。小柳町の防空壕は当時模範とされたため、敵機襲来とともに付近の者や通行人約30人が防空壕内に逃げ込んだ。ところが、多数の焼夷弾と爆弾によって付近は火の海となり、煙と熱気で壕内にいた全員が窒息し、その内12人が亡くなった。また、広瀬川に飛び込んで避難した人も破片弾などの直撃を受けるなどして大勢が犠牲となり、広瀬川河畔は戦争の記憶が深く刻まれる場所にもなった。

戦後、製糸業が衰退すると、広瀬川沿いの製糸工場は姿を消し、周辺のにぎわいも途絶えていった。1980年代後半には中心商店街の空洞化も手伝って河畔の人通りは激減、「生糸のまち」の痕跡も急速に失われていった。しかし、戦後復興で整備された美しい河畔景観の求



交水社の製糸工場(昭和5年)
提供: ふるさとの思い出写真集
前橋(国書刊行会)



広瀬川のかき船(昭和14年)
提供: ふるさとの思い出写真集
前橋(国書刊行会)



戦後の広瀬川遊歩道(昭和30年)



厩橋の句碑とオブジェ(昭和56年)

⁶ 広島でかき料理を提供していた屋形船を用いていたことから、通称「かき船」と呼ばれた。

⁷ 「昭和20年前橋市事務報告書」に記録されている当時の前橋市域での犠牲者数。

心力は高く、広瀬川の迫力ある流れと四季折々の緑に彩られた遊歩道は、都心部にいながらも潤いと安らぎを感じられる空間として市民に愛されるようになっていった。

製糸工場が立ち並ぶ風景に代わり、美しく整備された遊歩道の景観が市民に定着するにつれて、広瀬川河畔は再び本市のシンボルとして認識されるようになった。その最たるものが、昭和 57 年（1982）に市議会発議で制定された「前橋市市民憲章」である。市民憲章の冒頭に、「わたくしたちは水と緑と詩のまち前橋の市民です」の一文が登場すると、本市は「水と緑と詩のまち」をキャッチフレーズに使用し始める。平成 5 年（1993）に市制施行 100 周年の記念事業として諏訪橋と比刀根橋の中間地点に前橋文学館を開設、入り口脇に萩原朔太郎の銅像が建立されると、広瀬川河畔は「水と緑と詩のまち」を象徴する空間として高く評価されるようになった。

これ以降、市内外から広瀬川周辺の活性化を望む声が多く寄せられるようになり、これまでにさまざまなまちづくり計画が提言・立案されている。なお、平成 30 年（2018）には、厩橋から久留万橋までの区間が景観条例に基づく景観形成重点地区に指定されている。



前橋文学館

（2）関連する建造物

【シンボルとしての広瀬川河畔を構成する建造物】

①比刀根橋

比刀根橋は、昭和 8 年（1933）に竣工した鉄筋コンクリート造のアーチ橋で、アールデコ調のモダンなデザインが施された近代土木遺産となっている（出典：前橋市景観重要建造物悉皆調査・平成 26 年（2014））。橋詰の袖が川沿いに伸びているため、側面のみならず正面からの眺めもよく、令和元年（2019）に前橋市景観資産の「風景と視点場」として登録された。



比刀根橋

橋の北側の緑地はかつて防空壕があったところで、ここに避難した人々が悲惨な最期を迎えたことから、犠牲者を追悼するための「前橋市戦災被爆者平和記念碑」が建てられている。また橋には、空襲爆撃の弾痕跡が残っているとも言われ、空襲の悲劇を後世に伝える記憶遺産にもなっている。

②柳橋

親柱に大正 12 年（1923）竣工と刻まれる柳橋は、比刀根橋と同様にアールデコ調のデザインが特徴で、大正から昭和初期にかけてのデザイン史を物語る。こちらも令和元年（2019）に前橋市景観資産の「風景と視点場」として登録された。

古い写真によれば、竣工当時は鉄製の高欄であったが、現在はコンクリート製となっている。大正期に建造されたコンクリート橋としては、上流の旧石川橋（大正 4 年（1915））に続く先駆的事例であった。



柳橋

③^{こうすいげき}交水堰

比刀根橋下流の川床が急傾斜している部分は「交水堰」と呼ばれ、大正時代に交水社が自社工場に水を引くために造成したことに由来する。急流で白濁する様は、朔太郎の「広瀬川白く流れたり」の一文を彷彿とさせ、広瀬川の代表的な視点場となっている。



昭和 46 年（1971）の交水堰との比較

【シンボルとしての広瀬川河畔の街並みを構成する建造物】

④^{きくたろうきねんかん}朔太郎記念館

本市が誇る詩人・萩原朔太郎の生家は、かつて^{きたくるわちよう}北曲輪町 69 番地（現在の千代田町一丁目）にあったが、没後、敷地内の建物が順次市内の敷島公園ばら園内に移設され、朔太郎記念館として一般公開されていた。その後、平成 26 年（2014）に提出された「前橋市歴史文化遺産活用委員会提言書」の中で、朔太郎記念館の広瀬川河畔への再移築が提言されたことを受け、平成 29 年（2017）に現在地へ移築復元して現在に至る。



朔太郎記念館

ア ^{どぞう}土蔵

明治 34 年（1901）頃の建物とみられる。前橋空襲の戦火を免れ、ここに保存されていたノートや原稿、朔太郎宛の書簡など多くの資料が残されることとなった。



土蔵

イ ^{しょさい}書斎

生家の裏庭にあった味噌蔵を改造したもので、内部は、当時としては先進的な「セセッション式（西洋の建築工芸上の一様式）」に統一されている。これらは朔太郎自身の考案によるもので、「月に吠える」や「青猫」などの多くの作品がこの書斎から生まれた。



書斎

ウ ^{はなざしき}離れ座敷

明治 25 年（1892）頃、父・密蔵によって建てられたとみられ、主に来客の接待に使用された。朔太郎が生家に住んでいた頃、北原白秋や若山牧水、室生犀星などが訪れ、この部屋に通されたという。



離れ座敷

⑤^{あたごじんじや}愛宕神社

I — 1 — (2) — ②③を参照

⑥^{ひろ せ がわ び じゅつかん} 広瀬川美術館（旧^{こんどうよしお}近藤嘉男アトリエ及び絵画教室ラ・ボンヌ）

広瀬川美術館は、昭和 23 年（1948）に画家・近藤嘉男が自宅兼アトリエとして建設した建物で、子供絵画教室「ラ・ボンヌ」及び大人絵画教室「生活造形実験室」を併設した。没後、美術館としての補修・改築が行われ、平成 9 年（1997）に開館した。

外観はインターナショナルスタイルを意識した形で、正面の大きな窓は外部への開放性を備え、アトリエらしい工夫が伺える。ノスタルジックな空間の中、現在は美術品の企画展示やコンサート会場として活用されている。戦後の建造物としては全国で初めて、国の登録有形文化財（平成 11 年（1999））となった。



広瀬川美術館

（3）歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

①前橋空襲の慰霊と継承

前述のとおり、昭和 20 年（1945）の前橋空襲では、比刀根橋近くの防空壕に逃げ込んだ人々が悲惨な最期を遂げたことから、周辺は戦争の悲惨さを語り継ぐうえで象徴的な場所となり、慰霊と継承の活動が行われるようになった。

その発端は、「前橋市戦災被爆者遺族会（以後、遺族会）」による活動である。遺族会は、犠牲者を慰霊し戦争の痛みを後世に継承していくため、前橋空襲で家族を亡くした人々により昭和 41 年（1966）に発足した団体で（出典：広報まえばし）、毎年空襲の日に慰霊祭を執り行うことが恒例であった。慰霊祭は、はじめに妙安寺で慰霊法要を行い、その後、防空壕跡地にある前橋市戦災被爆者平和記念碑（平和記念碑）を参拝するもので、昭和 62 年（1987）の広報まえばしによれば、当時、100 人以上の遺族が慰霊祭に参加していたようである。なお、平和記念碑は、昭和 51 年（1976）に遺族会によって建立されたものである。



戦災被爆者平和記念碑

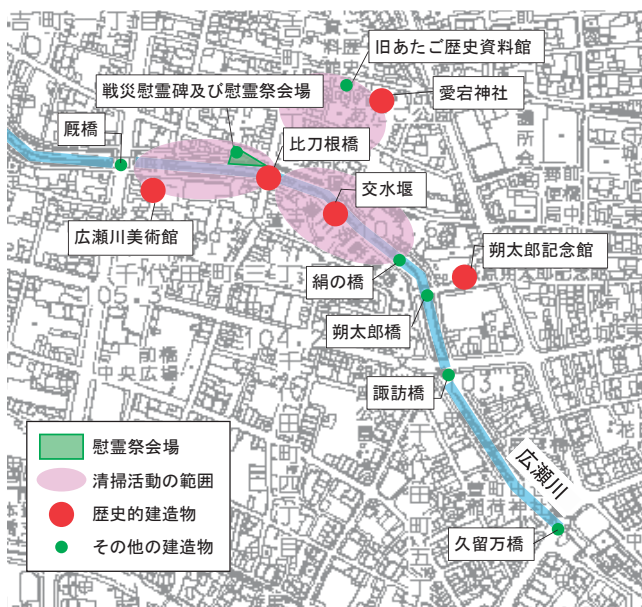


自治会主催の慰霊祭の様子

遺族会は終戦から約 50 年間活動が続けていたが、会員の高齢化のために平成 7 年（1995）をもって解散を余儀なくされた。慰霊祭は一旦休止となったが、「前橋空襲を人々の記憶から消滅させないように」との思いから、休止期間中も地元有志と空襲体験者による「前橋空襲を語る会」が行われていた。その後、平成 17 年（2005）に地元の住吉町二丁目自治会が慰霊祭と周辺の環境整備を引き継ぐこととなり、以来、毎年 8 月 5 日は、平和記念碑前に設置された祭壇に献花と祈りが捧げられ、地元の小学生が声を合わせて「平和の誓い」を読み上げる光景が見られるようになった。また、平和記念碑には、普段からたくさんの千羽鶴が供えられているが、これらは地域住民をはじめとする多くの市民（病院や企業などの有志）によって創作されたものである。住吉町二丁目自治会では毎月、周辺の愛護活動を行っており、花の手入れや草刈り、清掃を欠かさない。そのおかげで、平和記念碑周辺はいつも美しく、戦没者の追悼と平和への願いが顕在化された場所となった。これらの活動により、平和記念碑を中心に比刀根橋周辺は前橋空襲を今に伝えるシンボルとなり、その悲惨な歴史を語り継ぐうえで欠かすことができない。

このほか、住吉町二丁目自治会では平成 24 年（2012）から遊休市有施設を活用して「あたご歴史資料館」を運営していた。建物の老朽化や担当者の高齢化等の理由により、令和 2 年（2020）3 月に閉館となったが、館内では戦時中の写真、衣服や物品等が展示され、その多くは回覧板での呼びかけにより住民から提供されたものであった。資料展示に加えて、近隣の学校や NPO 法人と連携し若い世代向けの平和教育活動を実施するなど、資料館は戦争の悲惨さを地域に伝える大きな役割を果たしていた。その資料館で収蔵していた資料は、前橋市へと引き継がれ、現在新たな資料館構想を検討している。

こうした市民の地道な取り組みが契機となり、平成 28 年（2016）から市主催による「前橋空襲一斉慰霊」が行われるようになった。市主催の慰霊祭は元々、戦後すぐの昭和 20 年（1945）に龍海院（紅雲町二丁目）を会場に開催されたが、GHQ の進駐等の事情により、それ以来行われてこなかった。そうした中、当時、前橋市歴史文化遺産活用委員会の委員であった市内の神社・寺院・教会の代表らが市民に呼びかけ、信仰・立場などを超えた一斉慰霊を行うと共に、本市の歴史を学んだ市民が前橋空襲を語り継ぐ新たな形の慰霊行事が始まったのである。遺族会から住吉町二丁目自治会へと継承された戦災慰霊の取り組みはいまや中心市街地全体へと広がり、8 月 5 日は市内の至る所で平和への祈りが捧げられている。



②地域住民による美しい河畔づくり

戦後、本市の製糸業はすでに衰退期に向かっていったため、かつて川沿いに建ち並んだ工場や座（芝居小屋）、料亭などは徐々に姿を消していったが、戦後復興で整備された遊歩道や広瀬川美術館のようなモダンな建造物、柳や桜の植樹によって、広瀬川に美しい河畔景観がもたらされることとなった。このことにより、それまで産業用途のイメージが強かった広瀬川が住民に身近な存在へと変わりはじめ、その後住民による美しい河畔づくりの活動が活発になり始めた。



川の清掃活動（昭和 42 年）



緑の少年団の活動

広瀬川河畔の美観活動が始まった明確な時期は不詳であるが、昭和 39 年（1964）と同 42 年（1967）の「広報まえばし」にて、市民による花の植栽や川の清掃の様子が特集されているほか、近隣住民らが地域の公共用地の維持管理に取り組む「愛護会」（現在の公園愛護会）が、昭和 43 年（1968）以前に設立されていることから、少なくとも昭和 40 年代前半には始まっていたと考えられる。その後、公園愛護会に加え、昭和 60 年（1985）には地域の児童生徒らが主体となって活動する「広瀬川河畔緑の少年団」も結成されている。

現在も、愛護会では 4 月から 12 月までの期間中、遊歩道のある柳橋から久留万橋にかけて約 30 人



景観のルールと届出の手引き

広瀬川河畔景観形成重点地区

朔太郎の散歩道

〇前橋市

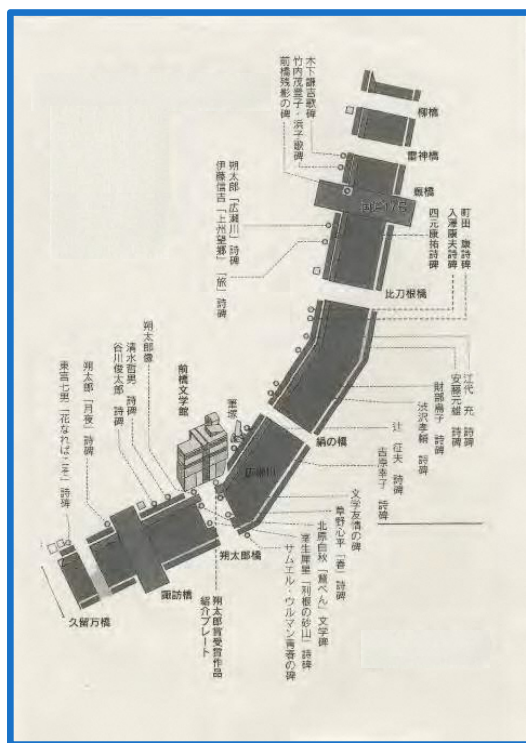
前橋市民にとって、今や広瀬川＝詩のイメージが定着しているが、このイメージを形づくったのは「萩原朔太郎研究会(以下、研究会)」の活動によるところが大きい。萩原朔太郎研究会は、朔太郎の調査研究・普及啓蒙を目的として昭和 35 年(1960)に発足した団体で、詩人・萩原朔太郎の国内外の研究者・愛好者で構成される。

廣瀬川
時をればやうの幻燈は消えぬ
わいの生涯を釣へんとて
坐すの目川邊に身をたしが
あひかを 福は縁にすきさ
として 夢は 胸にもたずす。

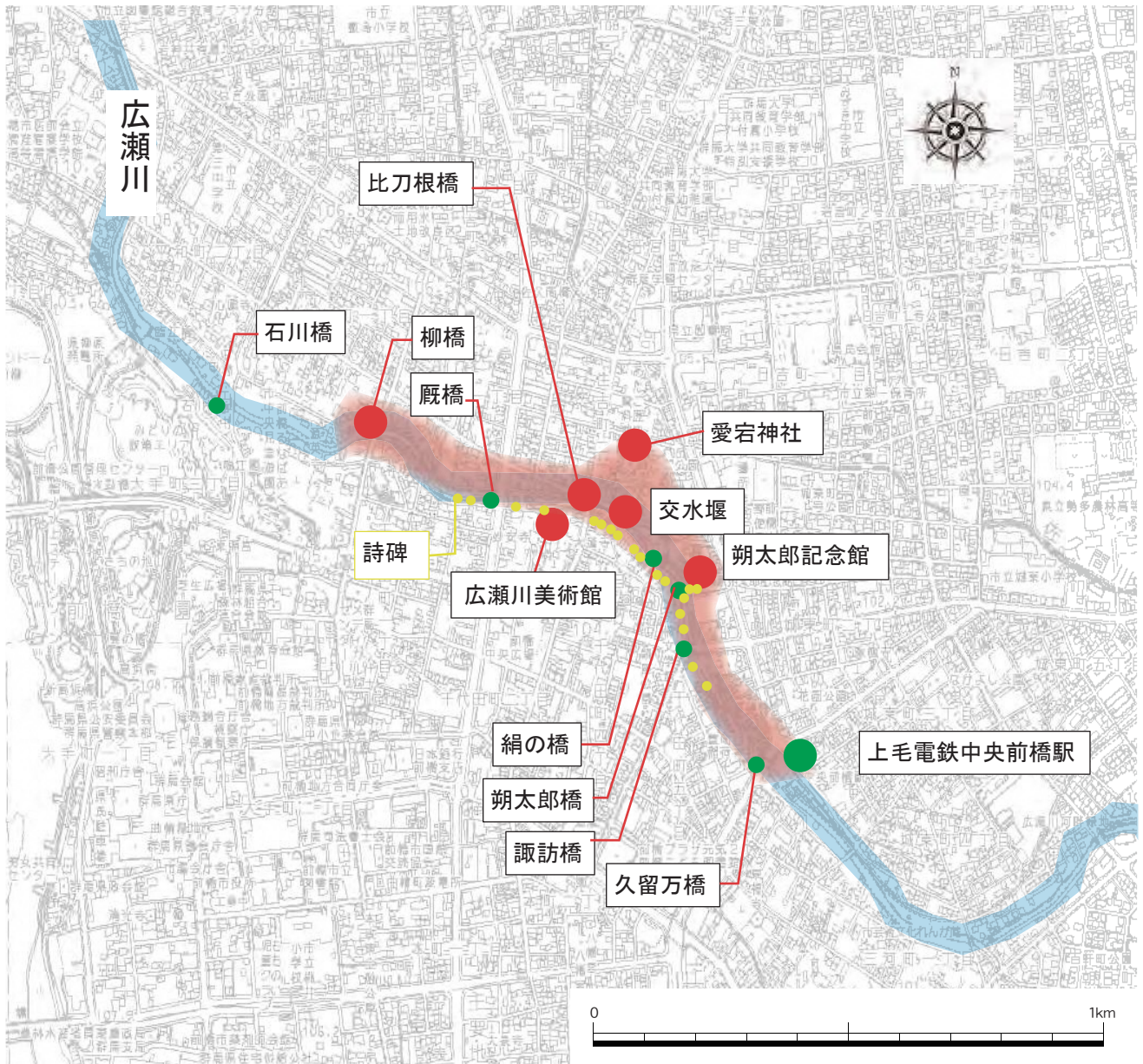
廣瀬川
廣瀬川 大塚

廣瀬川
廣瀬川白く流れたり
時さればみな幻想は消えゆかん。
われの生涯なつかを釣らんとして
過去の日川邊に糸をたれしが
ああかの幸福は遠きにすぎさり
ちひさき魚は眼めにもとまらず。

こうして、いまや広瀬川には「詩」のイメージが定着し、「詩のまち」のシンボルとも言える空間となった。また、研究会による詩碑の建立活動は、前述の萩原朔太郎賞の創設や詩碑巡りをはじめ、「朔太郎音楽祭（平成 18 年（2006）～）」、「朔太郎記念館の移築（平成 29 年（2017））」の呼び水となり、現在も官民を挙げた「詩のまち」のイメージづくりが続けられている。



I - 3 シンボルとしての広瀬川河畔にみる歴史的風致の広がり



凡例



シンボルとしての広瀬川河畔にみる
歴史的風致の範囲



歴史的建造物



その他の建造物



詩碑

【歴まちコラム・「生糸のまち」の記憶をとどめる活動】

製糸業の衰退に伴い、河畔近くにあった製糸工場は次々と姿を消していったが、せめて往時の姿を後世に伝えようと、「生糸のまち」の記憶をとどめる活動が行われるようになった。

- 厩橋／広瀬川に架かる国道 17 号（厩橋）には、欄干に生糸を巻き取る「大柁」がデザインされている。橋のたもとの碑には、「前橋残影の句」とともに座繰をする女性が描かれ、その脇には繭玉をモチーフとしたオブジェが設置されている。これらは、市と蚕糸関係団体によって昭和 56 年（1981）に建てられた。



前橋残影の句

- 絹の橋／比刀根橋と朔太郎橋の間には、交水社の従業員が対岸に渡れるように架けられた無名の人道橋があった。平成 8 年（1996）の改修の際、この橋を「絹の橋」と命名し、手すりは生糸をモチーフとするデザインとした。



絹の橋

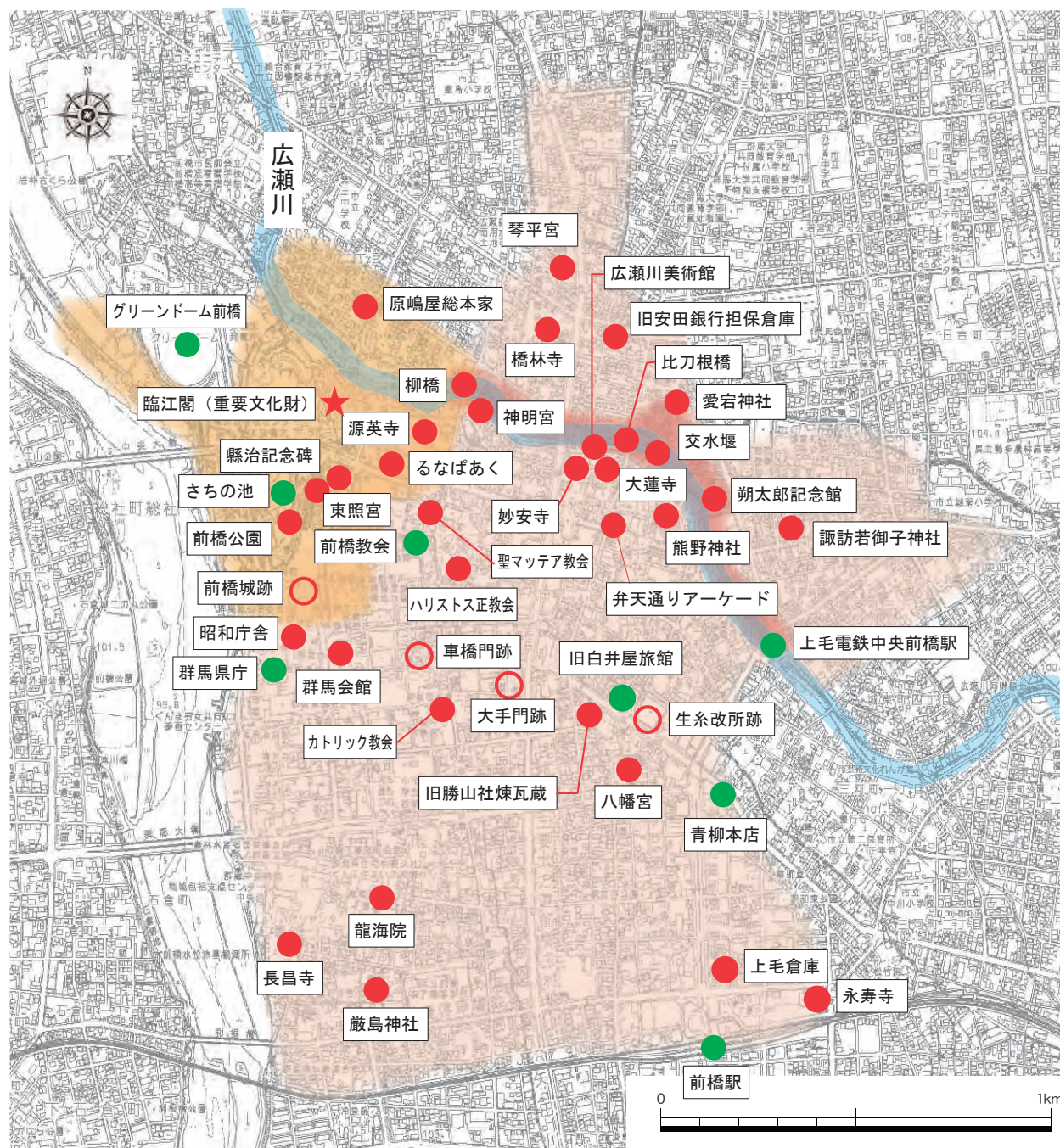
- 撚糸工場／繊維業の業態の一つに撚糸業があるが、本市では製糸工場とともに撚糸工場も多く稼働していた。広瀬川沿いには今も旧撚糸工場建物が点在していることから、平成 27 年（2015）から「蚕糸業に係る歴史的建造物群等調査」に取り組んでいる。



撚糸工場建物

- まちづくり計画／広瀬川河畔の活性化に向けて、各種のまちづくり計画が官民を問わず盛んに立案されてきた。中でも平成 26 年（2014）の「広瀬川テラス構想」は、前橋商工会議所を中心とする民間団体が策定したもので、「生糸のまち」や「朔太郎」といった歴史文化を生かした河畔整備が提案されている。

I 「関東の華」 から「生糸のまち」 への変遷にみる歴史的風致の広がり



凡例



街なかの伝統祭礼にみる歴史的風致の範囲

前橋公園の花見にみる歴史的風致の範囲

シンボルとしての広瀬川にみる歴史的風致の範囲



重要文化財



歴史的建造物



歴史的建造物跡



その他の建造物